



筑紫女学園大学リポジット

In Pursuit of Aurel Stein's Exploration in Northwestern Iran : Reconsidering his Fourth Survey and its Archaeological Implications

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, 下釜, 和也, OHTSU, Tadahiko, SHIMOGAMA, Kazuya メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/947

オーレル・スタインによる北西イラン踏査

～調査のまなざしとイラン考古学への今日的意義～

大津 忠彦・下釜 和也

In Pursuit of Aurel Stein's Exploration in Northwestern Iran:
Reconsidering his Fourth Survey and its Archaeological Implications.

Tadahiko OHTSU, Kazuya SHIMOGAMA

はじめに

「シルクロード」研究事蹟により斯界にその名を遺すスタイン（Stein, Sir Marc Aurel、英、1862年11月26日～1943年10月26日）。敦煌千仏洞（莫高窟、中華人民共和国甘肅省敦煌市）の仏画、仏典史料の発見・調査研究が、所謂「敦煌学」へと昇華する契機こそ、スタインによる「第二次中央アジア調査」（1907年）に由ってであったことは、いまでこそ「文化遺産」保存問題の世界的趨勢からその功罪は相半ばするところながら、学史上の確たる事実ではある。この敦煌における未曾有の調査成果が決して偶然ではなかったこと、これについてはスタインの著わした読み物としての踏査記⁽¹⁾が、その実施から四半世紀を経過して後に、かなりの紙幅をさいて、しかしながら淡々と記すところにより看取することができる。

スタインによる中央アジア調査活動は1900～01年の初回以来、1906～08年、1913～16年の都合3次を数え、それぞれの学術的成果の全貌は大著を以て公刊されている⁽²⁾。それらのうち、『Ancient Khotan』（1907年）と『Innermost Asia』（1928年）には、ふたりの東洋学者すなわち、マルコ・ポーロ『東方見聞録』の研究でしられるユール（Yule, Henry、1820～89年）と、楔形文字の研究、解読（1837年）で著名なローリンソン（Rawlinson, Henry、1810～95年）あての献辞が礼を尽くしてしたためられていることは、スタインの研究歴を表徴するものである。すなわち、彼らの知遇を得、そして彼らとの好誼こそが、スタインをインド行さらには中央アジア調査へと誘うこととなったからであろう。

年譜に辿れば、スタインの中央アジア調査活動はおもに「シルクロード」の要衝ホータン（和田、「于闐」）から所謂「西域南道」を経由し、東は敦煌、カラ・ホト、西はカシュガール、サマルカンド、ブハラに至る広範な沙漠域であった。その多彩な採集資料の大部分はインド国立博物館、大英博物館の所蔵するところとなっている。これら一連の、すなわち1900年代から1920年代一杯は、当時のいわゆる「中国領トルキスタン」における調査研究へのまさに刻苦奮闘期であり、当然なが

ら爾後も継続されるべき予定であった。しかしながら、1930年、みずからの人生を賭したともいえるその調査活動の一大転機を迎える。すなわちスタインの「第4次中央アジア調査」実施は、事実上失敗裡に終息せざるを得なかったのである。この間の経緯、背景の様態については、近年かなり明らかにされるようになった⁽³⁾。爾来、スタインはフィールド活動の主たる対象地をさらに西方の「西アジア」に移し、1932年の第1次イラン踏査へと継起していったのである。

もっとも、スタインには、それまですでにイランにおけるフィールドワークの実績をいくつか見ることができる。ひとつは、第3次中央アジア調査終盤（1915年）におけるクーヘ・ハージャ遺跡（シスターン・バルチスターン州）の発見である。遺構に残る極彩色壁画について、「武将の高々とかがげられた右手にあるのは、牛の頭をつけた弓なりの^{ほこ}鉦である。この鉦の形状は、ペルシアの叙事伝説に登場する偉大な英雄ルスタムが携えていた有名な牛頭のグルズ(鉦)に正確に一致する。これこそ、回教時代のペルシア図像学のいずれにもはっきり承認されているルスタムの標象なのだ」、「七世紀に属する後期ササン王朝の時期のもの」⁽⁴⁾と所見を述べている。また、1928、29両年には、インダス文明との関連究明をめざし、英領バルチスターン(当時)へ赴き、バンプール川、ハリール川溪谷調査を行い、多くの先史時代遺跡を彩文土器資料に拠って確認。さらには、銅石器時代（あるいは青銅器時代）の重要遺跡のひとつタル・イ・イブリース遺跡（ケルマーン州）⁽⁵⁾を調査報告している。なお、スタインが調査対象域を新たにイランへ替えたのは、中途ウルムチで断念せざるを得なかった「第4次中央アジア調査」（1930年8月～31年7月）への「外圧」からのみではなく、予てより抱き続けていた「アレクサンドロス東征路を辿る」という目的があったからである。

I. スタインによるイラン踏査の概略（1932年イラン踏査以降より）

スタインの本格的イラン調査はグワドゥル（現パキスタン領）からバンプールを経由してバルチスターンを辿り（第1次イラン踏査1931年1月～4月）、一時英帰国により中断後、同年再開してケルマーンから南下し、ミーナーブ（旧ホルモズ）、バンダル・アッパース、シーラーフ（ターヘリ）を巡り、プーシェフルへ至る路程（第2次イラン踏査1931年11月～1932年2月）より始まった。すなわちペルシア湾岸路であり、採集品の「多彩釉刻線文字文」イスラーム陶器やイスラームコインには、多くの中国陶磁器片や中国貨幣が伴った。これらは所謂「海のシルクロード」の所産である。さらに先史時代に関して、たとえばハラジュ近くの遺丘において、ベルセポリス近郊に見出される彩文土器に類似する資料を確認している。この第1次、第2次イラン踏査成果は後年1937年に、*Archaeological Reconnaissances in North-western India and South-eastern Īrān* (Macmillan and Co., Limited, 1937) として公刊された。

引き続き第3次イラン踏査（1933年11月～1934年5月）は、イラン南域ファールスにおいて行なわれた。その主目的のひとつは、先史時代におけるインダス文明やメソポタミア文明との関連性究明であった。スタインはシーラーズよりフィールーザーバード、ファサー、サルヴェスターン、ダーラフ、バサルガダエ等を巡り、数多くの銅石器時代に遡る遺丘を確認し、数多くの石器、彩文土

器のほかイスラーム陶器、コイン、ガラス遺物を採集した。さらに、サーサーン朝時代の遺跡、すなわちダーラフ近郊ナクシェ・ロスタムにシャープール I 世の対ローマ皇帝ヴァレリウス戦勝浮彫碑、サルヴェスターンにバフラーム V 世創建宮殿址、フィールーザーバードにアルダシール I 世創建円形集落址等を踏査した。山間の踏査にスタインはラバを活用したが、その粗食に耐えて強靱な性向は、かつてのイラン東部踏査の経験からスタインは熟知していたようである。なお、第 3 次イラン踏査の成果は、英国イラク考古研究所 (British School of Archaeology in Iraq) 紀要『IRAQ』の第 3 巻第 2 号全頁を費やし詳報された⁽⁶⁾。

最終回となる第 4 次イラン踏査 (1935 年 11 月～1936 年 12 月) は、シーラーズからザグロス山岳域を経由してウルミエ湖に至る、4 次になわたるうちで最長の北上路程であった (図 1)。途次、フーゼス

ターンにおいてはサーサーン朝期「拝火神殿」や古橋のほか、先史時代の彩文土器 (ベフバハーン) やエラム期の岩彫刻 (マラミール、現イーゼ) 等を報告。また、パルティア期の「青銅貴人像」(イラン国立考古学博物館蔵) として周知の資料は、スタインがマラミール (現イーゼ) 北方 45km のシャーマイにおいて、この踏査時にその価値を見出したと伝えられている。ルリスターンではサイマッラー渓谷やルミシュカーン渓谷の遺丘の試掘により、当該地域における鉄器時代土器資料を得た。この後、サッケーズを経由し、予てより知られていたカラフトゥ洞窟のいわゆる「伝道碑文」(ヘレニズム期) へ至り、その解明に寄与することとなった。

ウルミエ湖方面へ進行するや、ディンカ・テペ遺跡においては前 2 千年紀末の古墓発掘によって彩文土器資料を、また、ハサンル遺跡ではいわゆる「シアルク B タイプ」土器を有する前 1 千年紀の古墓を見出した。これらの遺跡は、後年、1950、60 年代にアメリカの研究者により再調査され、

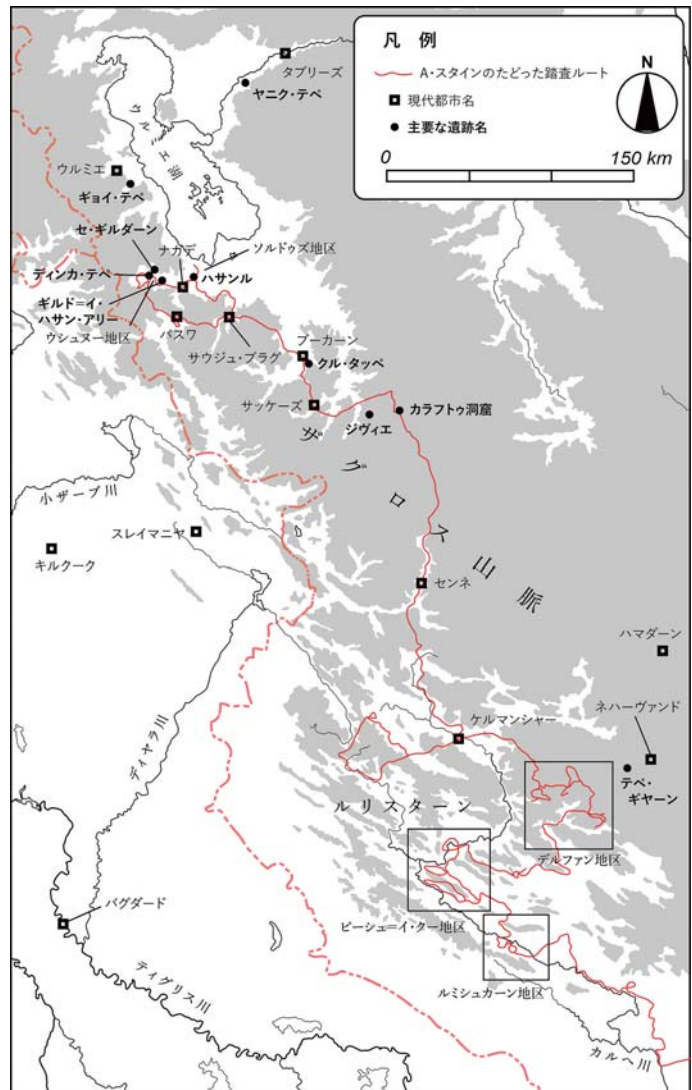


図 1 スタインによる第 4 次イラン踏査のルート

とりわけ後者はイラン北部鉄器時代の標準遺跡となっている。スタインによる踏査成果が、後の研究に発展的寄与した好典型のひとつとみなすことができよう。なお、第4次イラン踏査成果については、Stein1940⁽⁷⁾に詳しい。

スタインがイラン踏査に専心従事した1930年代初・中期当時、国号はペルシアからイランへとかわり（1935年）パフレヴィー朝による近代化路線がスタート。「イラン考古学」もひとつの変革期を迎え、それまでのフランスによる調査活動の実質的独占が改まり、アメリカやスウェーデンの新参が加わった。ペルセポリス遺跡調査（1935～39年）団長シュミット（Schmidt, Erich F.、米、1897～1964年）が、1935年から翌年にかけて、複葉単発飛行機「フレンド・オブ・イラン」により東はダームガーン、サブゼヴァール、西はケルマンシャー、ルリスターン、そして西北方はウルミエ湖周辺等、処方のイラン主要遺跡を空撮したことは象徴的である⁽⁸⁾。イラン考古学の古参フランスもまた、それまで本拠地としていたスーサ遺跡に加え新たな拠点をイラン高原北部にもとめ、ネハーヴァンド近郊のテベ・ギヤーン遺跡（1931、32年調査）ならびにカーシャー近郊テベ・シアルク遺跡（1933～35、38年調査）にギルシュマン（Ghirshman, Roman、仏、1895～1979年）が挑んだ。これら当時の新たなイラン考古学動向へ、スタインによる先駆的「イラン踏査」の成果が如何様に影響し、かつ反映されているかについては幾重にも再考されるべきであろう。

II. スタインによるイラン踏査の方法と限界

東トルキスタン・中央アジアからイラン高原に至る歴史地理学および考古学に多大な足跡を残したスタインは、自らの遺跡調査・踏査をどのように位置づけていたのだろうか。本稿では第4次踏査のうち北西イランザグロス山麓の踏査、センネ（現サナンダジュ）からウルミエ湖南岸に近いナガデヤウシュヌー（現オシュナヴィーエ）にかけてのルートを主な対象として、その調査方法の特色と限界について論じる。以下、スタインが辿った調査ルートの設定から、遺跡の同定、遺物の採集と記録、場合によっては地形測量や試掘まで、出版された調査報告書に依拠しながら考察する。

（1）調査方法：遺跡の同定

スタインの第4次イラン踏査は、第3次の終点であったシーラーズから北西方面へ向かうルートがとられたが、このルート選択については古代エラムの故地とペルシア湾奥部とを結ぶ大動脈の一つであり、古代史研究において重要と判断されたためであった⁽⁹⁾。また本調査においても文献史料が記録しない先史時代の考古遺跡調査を目的としていた⁽¹⁰⁾。それと同時に、各地域の歴史の原動力となった地理学的知識を実地調査によって把握し、古代歴史地理の解明に寄与することがもう一つの柱であった。後者によって、古代通商路の復元は言うに及ばず、例えばアレクサンドロス大王の遠征ルートがどのように選択されたかを理解し、文献記録と照合することに資する。そこでまず考えるべきは、スタインがどうやって未知の遺跡を探し出し特定したかという点である。

遺跡の同定については、移動によって視認できるテペ型遺跡が何より対象となった⁽¹¹⁾。イラン高

原、特にザグロス地域のように峻険な褶曲山脈で圍繞された山間盆地を踏査する場合、複雑に入り組んだ近隣の溪谷まで一望のもとに見渡すことは至難である。そのため現地住民の情報が遺跡発見につながることも多かったらしい。例えばナガデ近郊の調査では、旅上で厚誼を忝くしたハーン・ラシード・アッ＝スルタナや周辺村落の長 (*kadkhoda*) が遺跡情報を提供してくれたという⁽¹²⁾。

スタインは踏査で先行調査者が作成した地図を利用することもあった。北西イランは第一次世界大戦以前からH・ローリンソンやJ・ド・モルガンが古代文物の調査を実施していた地域である。スタインは40年前に製作されたド・モルガンの地図を「略図ながら考古学的に非常に有益」と評価しつつ、サウジュ・ブラグ(現マハーバード)北西の盆地付近における遺跡探索で参看している⁽¹³⁾。

スタインの調査は馬での移動を主としており、遺跡探索も移動ルートに沿って行われることが多かった。これは調査報告の巻末に附された地図の第4次踏査ルートを見ると歴然とする(図1)。ルリスターンのルミシュカーン地区や、後述のソルドゥズ・ウシュヌー地区のように集中的に遺跡調査を実施した地域もあるものの、基本的には調査地域は限られた地理範囲を集中的、面的に探訪するのではなく、線的に移動しながら踏査するという性格が濃かったといえる。そのため、後に数多く発見されることになる古代の山城遺跡(ジヴィエやガルトガー、ガライチー城址など)や山岳部の古墓群は、スタインが通過したルート直近に位置するにもかかわらず殆ど訪問していない⁽¹⁴⁾。その意味で、彼の調査手法が山地で区切られた盆地や平原といった、ある地域内に存在する古代遺跡の悉皆調査を目指したものではなかった点は否めない。当時の学界の考古学研究が平野部に散在するテペ型集落遺跡を優先していたことも、イラン高原における古代遺跡に対するスタインのまなざしの制約となっていただろう。

スタインの遺跡踏査に対して、奇しくもほぼ同時の1934年冬、北東シリアのハブル平原でM・マロワンが実施した遺跡踏査は、一定の地理的領域を対象としてそこに分布するあらゆる年代の遺跡群のデータを網羅的に記録するものであった⁽¹⁵⁾。1933年、アムク平原を対象としてR・J・ブレイドウッドを中心にシカゴ大学東洋研究所が実施した遺跡踏査もマロワンのそれと軌を一にする⁽¹⁶⁾。スタイン踏査は調査目的の観点からも調査計画についても、これらとは本質的に異なるものであったと言える。実際、前二者は複数の遺跡における集中的な発掘調査の一環として行われた踏査だが、スタインの行った発掘は踏査に伴う限定的な試掘に終止した。南メソポタミアを対象として古代灌漑水路網と集落分布の時期的変遷との間の関係を研究したR・アダムズの調査は、目的指向型の遺跡分布調査を行った嚆矢といえるが⁽¹⁷⁾、第2次世界大戦後になるとイランやイラク、シリアなど西アジア各地で、集落遺跡の規模や分布のあり方、土器片の分布密度、時期別傾向を統計的に分析する遺跡分布調査(サーヴェイ)が活発になっていった⁽¹⁸⁾。これら現代考古学の遺跡分布調査につながる方法と対置されるスタインの踏査は、いわば未踏地域を走破し⁽¹⁹⁾、歴史地理と考古学を結びつける19世紀以来の探検旅行的な要素が色濃い。

(2) 調査方法：遺跡における表面採集と測量

現地でテペやギルドなどと呼ばれる遺跡では、風雨による浸食作用や掘削によって日干煉瓦や礫からなる住居建築の残骸、古代人の生活残滓、遺物などが地表面に露出する。他の考古学者同様、

スタインもこのような遺跡の表面で採集できる遺物をサンプリングし、遺跡の年代を推定している。以下、スタインの報告書からいくつかの事例を抜粋しながら、遺跡の記載を確認してみる。

例えば、パスワ（現パスヴェ）においてスタインは遺跡上の平坦地に天幕を張って一時的な拠点とし、近隣盆地に散在する古代遺跡群を約1週間にわたって多数訪問した⁽²⁰⁾。ここでは20地点を超える遺跡を確認したが、農作業が繁忙となる収穫季にあたったため、試掘を行うほど十分な労働力は得られなかったという。ギルティク・シピアーンとクンドラという遺跡では、最近の居住堆積が厚く斜面を覆っていたため、「無文土器しか」採集できなかった。これらに対し、ギルド＝イ・パティク、ギルド＝イ・サルバラーン、ギルド＝イ・マフムード・アガーなる遺跡群では、運良く現代の堆積を伴っておらず、黒曜石製のものを含む石器、赤色磨研土器の破片を得た。ギルド＝イ・ホスロウ遺跡は上述のギルティク・シピアーンの西3マイルにある丘に囲まれた平地に立地し、周囲の地表面から高さ33フィート、頂上部で優に180ヤードを測る広さを占める。表採品は施釉陶器片に混じって濃赤色磨研土器が含まれていた。また、二彩土器片がザンガーワ村に面する低い遺丘で採集されたという。キトカーン遺跡では多彩釉陶器片とともに刻文陶片が頻出し、9～10世紀のイスラーム期の陶器と推定する。

このように、スタインは訪問した遺跡において採集された土器片を中心に記載を進めている。石器や青銅器などその他の遺物があれば、それらにも言及することもあるが限定的である。当時の学界では発掘調査が西アジア各地で進展し、先史民族集団の移動や文明発展を理解する上で基本となる考古資料がある程度揃ってくるにつれ、特に彩文土器の分布から先史文化の解明と編年構築をめざす機運が高まっていた。スタインの採集資料も、それまで未開拓であった地域の古代遺跡から基礎資料を提供するという点で非常に重要な情報であった。さらに彼は彩文土器だけでなく、青銅器時代以降の磨研土器や中世イスラーム期の施釉陶器にも同程度の言及をしている点も注目に値する。

採集遺物の記載のほか、ギルド＝イ・ホスロウ遺跡の記載のように、立地環境の説明や簡単な測量を行う場合もあった。遺跡の規模にもよるが、パスワ地区の場合、8マイル（約12.8km）四方を1週間程度で踏査し、合計20箇所を超える遺跡を訪れているので、1日あたり平均3遺跡の計算になる。すべての訪問遺跡を地形測量したわけではないかもしれないが、スタイン本人とわずかな調査団員だけで行なった調査としてはかなり過密な行程であった⁽²¹⁾。特に、ヘレニズム時代以降の遺跡にも関わらず、スタインが碑文の解読とその紹介に多くの紙幅を割いたカラフトゥ洞窟では、3日間滞在し、詳細な記載を行うと同時に洞窟内の略図を作成している⁽²²⁾。この他、報告書にはウシュヌー地区のディンカ・テベ遺跡およびギルド＝イ・ハサン・アリー遺跡群の平面図、ソルドゥズ地区のハサンル遺跡の平面図が掲載され、それぞれ試掘調査のトレンチ位置を明記している。

（3）調査方法：試掘調査

新たな遺跡を発見し、それが層位的な知見を得るのに有益だと判断した場合、遺跡の試掘を行うことも中央アジア踏査以来スタインの踏査の定石であった。ただ一箇所の遺跡に長期間滞留して、発掘を実施することは彼にとって副次的な意味しか持たなかったようで、どちらかといえば前人未

踏の地における新たな考古学的・地理学的発見を最優先させていた形跡がある。たとえばブーカーンの南に位置するクル・タッペで、「層位的な証拠（stratigraphic evidence）が時間の制約により得られなかった」⁽²³⁾と言及している箇所は、サウジュ・ブラグ北西からウシュヌーにかけて、すなわちウルミエ湖南岸の平原地帯に多数分布する遺跡が考古学的に重要とみて、先を急いだことによる。

本稿で対象としている北西イランにおいてスタインが試掘調査を実施したのは、ディンカ・テペ、セ・ギルド（セ・ギルダーン；後述）、ギルド＝イ・ハサン・アリー、ハサンルの4遺跡である。予め古代の文物が出土したという情報を察知していたディンカ・テペについては、河川によって削平されたテペ北側斜面で「銅石器時代」に遡る堆積層の存在を確認したことが試掘に踏み切った理由である（この年代同定については後述）⁽²⁴⁾。1936年当時、特にイラン西部の先史時代はネハーヴァンド地方のテペ・ギヤーンの発掘を除けば、北西イランの先史時代がどのような様相を呈していたか未解明であった。ガーダル川一帯の遺跡踏査を駆け足で済ませたスタインは1936年8月18日に宿営をディンカ・テペに移し、翌日に試掘調査に取りかかった。試掘地はガーダル川に削平された北側斜面に2本設けられた（写真1）⁽²⁵⁾。墓から出土したと思われる完形土器複数が出土した地点の近くであるが、遺跡の層位堆積状況の確認と土器資料を層位的に獲得することを目的としたものである。2本の試掘トレンチの調査はそれぞれいくつかの発掘区に分けて6日間実施し、地区によっては約4～5m程度掘り下げられた。その結果、河川水面より高さ20フィートまでの下層では彩文土器群が出土したのに対し、上層の彩文土器は帯文がめぐるだけの単純なものに変化することが分かった。また下層出土土器には非常に薄手の無文精製土器片が伴うこと、さらに磨研土器の出現比率も下層に集中する点に注目している。石器がいずれの層でも出土しない一方、青銅器は上下層ともに確認されること、そしてハサンルをはじめとするソルドゥズ地区の遺跡で多くみられる畝状装飾のついた暗灰色・黒色磨研土器が存在しないこと、従ってディンカ・テペの「銅石器時代」はソルドゥズ地区のものより古いという指摘を行っている⁽²⁶⁾。このように、出土資料によって考古文化の層位的変化を読み取る発掘手法は、すぐれて科学的である。しかし、スタインの報告を繙く限り、これらの試掘において層位的な発掘を行ったという記載はない。西アジアの遺跡では頻出する煉瓦壁などの遺構検出についても言及はないが、これはスタインが試掘した地点に住居址などの遺構が本来存在しなかったのか、それとも彼が単に検出できなかったのか判断できない。

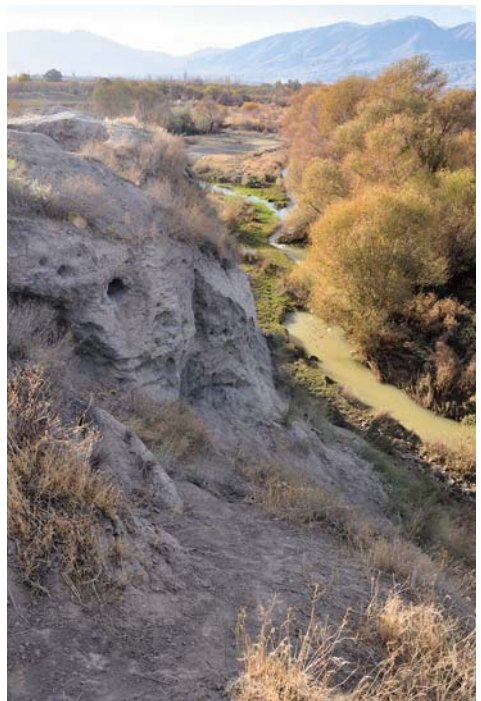


写真1 ディンカ・テペ遺跡。スタイン試掘坑を東から見る。



写真2 ギルド＝イ・ハサン・アリー遺跡。手前にB丘、奥にA丘を望む。写真中央の凹部がスタイン試掘坑。



写真3 ハサナル遺跡。スタイン試掘坑を南から見る。

このことは他の遺跡の試掘でも窺える。ギルド＝イ・ハサン・アリー遺跡はディンカ・テペの東、デ・シャムス村（現存）の南東約4マイルに位置する小型遺跡である。遺跡は2つの丘からなり、高い遺丘をA、低い方をBと呼称し、スタインはそれぞれにおいて5日間の試掘調査を行った（写真2）⁽²⁷⁾。A丘での発掘では「建築遺構には遭遇しなかった」とし、ディンカのものとモルリスターン地方の彩文土器とも異

質な幾何学文土器が見つかった。下層では粗製土器の出土数が増加する点に着目しつつも、この種の彩文土器は下層に達するまで変化なく「銅石器時代」が長く続いたものと評価した。また、彩文土器と共に、無文土器や手製とみられる粗製土器、ハサナルの古墓出土品と類似する暗灰色の磨研土器も出土したという報告を紹介している。しかし、やはり層位的な発掘をおこなった形跡はない。

次にスタインが移動したのがハサナル遺跡である。ソルドゥズ地区最大級の重要遺跡であるハサナルに関して、スタインは墓から出土した磨研土器をナガデ滞在中にすでに目睹しており、その存在は知られていた。北側斜面の低い位置に試掘トレンチを2つ開け、6日間発掘がおこなわれた（写真3）。その後の調査によって遺丘の頂部は中世のイルハン朝時代以下、鉄器時代の分厚い土層堆積があったこ

とが判明したが⁽²⁸⁾、このトレンチの立地からも、スタインの主目的が先史時代にあったことが明白である。ハサナルの試掘調査の記録を読むと、「明確な層位堆積は出土土器から確認されなかった」とし、胎土色調を異にする二種の土器について「すべての層位（levels）を通じて磨研土器の比率は均質であった」という⁽²⁹⁾。彩文土器はここでは全く出土しなかった。前述の遺跡同様、土層や堆積状況、建築遺構などの記載は殆どなく、場合によっては遺丘斜面の堆積でよくみられる二次堆積部分にあたったのかもしれない。ハサナルではさらに、現地住民や古物商による発掘を蒙っていたテベ北側の平坦部でも試掘区を2箇所設けた。ここでは土器や鉄製品、石製品、青銅・銅製装身具等を副葬した墓を多数確認している。結局、スタインはこれらの試掘成果にあまり満足しなかつ

たようで、「…いくら長期にわたる発掘調査を広範囲で実施したとしても、何らかの新事実を明らかにすることはないと結論するのが至当であろう」と「後ろ髪を引かれることなく (with a free conscience)」ハサナルを後にした⁽³⁰⁾。

スタインの発掘調査記録を点検してみると、土層や遺構の堆積を詳細に観察しながら建築層に従って掘り下げる綿密な方法ではなかったようだ。しかし、スタインによる試掘調査はわずか数日間の短期間にすぎない試掘だったとはいえ、これまで未知であった同地域の古代文化に関する基礎資料をもたらすとともに、以下に述べるように第二次大戦後のイラン考古学への先鞭ともなった。

以上、スタインの遺跡踏査をいくつかの点で見直してみると、彼の目的と方法論および遺跡に対するまなざしが浮かび上がってくる。スタインの主目的は1千kmを優に超えるルートを通じて、何よりも欧米人にとって未踏の土地を踏破し、ルート上の古代遺跡や史跡を記録するとともに地理学的発見を指向する調査方法であった。そのため、考古学的には1箇所の遺跡で長期的な発掘調査を重点的に行うのではなく、あくまでサンプリングのために狭小な範囲の試掘調査を行うものであった。特に彼の関心にあったのは彩文土器の分布と消長に関する文化史的解明にあったようだが、このような調査の性格上、確乎とした考古編年を構築するには至らなかった。20世紀後半に盛んになった目的的な遺跡分布調査ではなかったにせよ、彼が踏査した地域における基礎資料を提供したという点では非常に重要である。I. で述べたように、1930年代当時、フランスによる考古文物調査の独占体制が終焉を迎え、欧米各国の調査団による先史遺跡の発掘調査が活潑化していた。テベ・ギヤーン、テベ・シアルク、テベ・ヒッサール、タル＝イ・バクーンなどイラン各地の遺跡が重点的な発掘調査の対象となり、イラン高原における先史考古学の基礎的な編年体系を確立することになる⁽³¹⁾。スタインの踏査はこれらを意識しながらも差別化をはかり、未知の地域の遺跡情報をもたらした点で画期的な成果を残したと言える。

Ⅲ. スタイン調査の見直しと再評価

以上に述べてきたように、スタインの調査方法には、今日の考古学的観点からみて限界はあるが、彼の詳細な踏査報告とその知見はその後の調査研究の礎となった。まずスタインが幻滅したハサナルは、その後1956年以来米国ペンシルヴァニア大学博物館を中心とする継続的な発掘調査が実施され、北西イランにおける最重要遺跡として土器編年の基礎となったことはここに贅言を要しないだろう。深掘りトレンチの層位編年や前800年頃の鉄器時代の宮殿・神殿遺構、その上層のウラルトゥ時代の城壁遺構、豊富な出土品は、今なおその解釈と評価をめぐる研究が絶えない⁽³²⁾。

スタインが試掘したディンカ・テベも、同じく米国のハサナル調査団によって再調査された。調査の結果、前2千年紀初頭のハサナルⅥ層併行期から、前1千年紀初頭に当たる鉄器時代、イスラーム期まで4つの時期に区分されること、そして主に彩文土器をもとに判断したスタインの「銅石器時代」という年代観は誤りであったことが明らかとなった⁽³³⁾。北メソポタミアに分布するハブール式土器が同遺跡にも出土することを確認し、中期青銅器時代における北イラク方面との地域間交流

を実証したのもディンカ・テペである⁽³⁴⁾。

セ・ギルダーンはウシュヌー地区北部に位置する円錐丘群で、スタインは試掘の結果みつかった礫質堆積土からみて自然丘陵の残滓に過ぎず、人工の遺跡ではないと断定していた⁽³⁵⁾。しかし、1960年代にO・W・マスカレッラを中心とする米国隊が再発掘を行い、鉄器時代Ⅲ期の巨大墳丘墓であると結論付けた⁽³⁶⁾。さらにその後に行われた出土遺物の検討から、北コーカサスに前4千年紀に分布したマイコープ文化との強い類縁性をもった首長級のクルガン墓であることが論証され、発掘者のマスカレッラもこれを認めている⁽³⁷⁾。近年、類似する副葬遺物が見つかったアゼルバイジャン共和国西部のソユク・ブラク遺跡のクルガン墓とも比較でき、前4千年紀におけるコーカサス・イラン高原の関係を探る上で今後ますます重要となる遺跡である⁽³⁸⁾。

ハサナル遺跡の調査に向かう前にスタインが試掘した小規模遺跡ギルド＝イ・ハサン・アリーでは、再発掘は行われていないが、出土土器の再検討が最近行われた。スタインが報告した精緻な幾何学彩文土器は、前期青銅器時代の北西イランに分布する特異な土器群として、彼の発掘資料に基づいて「ハサン・アリー式土器」として定義されている⁽³⁹⁾。この土器群は前期青銅器時代において同地域の土器文化の様相がどのように変化したかを解明する手がかりとして、クラ・アラクス系の黒色磨研土器や橙色彩文土器（Painted Orange Ware）と並んで重要な鍵となる可能性を秘める。これら前期青銅器時代の多様な土器群の編年の位置付けは、近年の考古学的課題となっている⁽⁴⁰⁾。

以上のようなスタインが試掘した遺跡の再評価とは異なるアプローチも、戦後になって北西イラン考古学にとって重要な成果として結実した。米国によるハサナル調査団は、巨大遺跡ハサナルの発掘調査を重点的に行うとともに、近隣の遺跡の踏査も集中的に実施している。前述のマロワンやブレイドウッドらによる一定の地域の遺跡分布調査と同趣意で行われた、ウルミエ湖南岸ソルドゥズ～ウシュヌー地区（ガーダル川流域）の遺跡分布がそれである。発掘に適した遺跡を選定すると同時に、スタインによる先駆的な遺跡踏査を補完する目的で、1956年、ダイソンが約4ヶ月間遺跡踏査を実施した。その後、踏査の結果発見された遺跡の一部（ダルマ・テペ、ハッジ・フィルーズ・テペ、ピスデリ・テペ、アグラブ・テペなど）はすぐに発掘・試掘調査の対象となり、特にソルドゥズ地区における先史時代の編年構築にめざましい成果があった⁽⁴¹⁾。遺跡分布調査自体の報告は長らく公開されていなかったが、最近ダンティがその一部を公刊している⁽⁴²⁾。また、ハサナル調査団によって確認された遺跡のなかには、すでにスタインが報告しているものも含まれていた。テペ・ミラーバードやサクセ・テペなどがそれであるが⁽⁴³⁾、これまでに考古学的発掘調査は行われていない。スタインが訪れたブーカーン市南郊のクル・タッペヤゴム・カレ北のセ・ギルドも管見の限り未調査である。

スタインが踏破しなかった北西イラン各地の遺跡踏査は、1979年のイラン・イスラーム革命までに主に諸外国の調査団によって実施されてきた。ウルミエ湖西岸を中心にウシュヌー地区も含めた網羅的な遺跡分布調査を行ったイタリアのP・ペコレッラとM・サルヴィーニ⁽⁴⁴⁾、北西イランの東アゼルバイジャン州を隈なく踏査してきたドイツのW・クライスとS・クロル⁽⁴⁵⁾、ウルミエ湖南の東クルディスタンから南東アゼルバイジャンにかけての山岳地帯を調査した英国のS・スウィニーなど⁽⁴⁶⁾、遺跡の分布状況はかなり明らかになっている。ただ問題点は、革命以降研究が立ち後

れてしまい、豊富な遺跡データを活用した細かな集落動態の研究に結実していないことと、そして各時代の文化的様相を明らかにするための十分な発掘調査が限定的であることにある。

その意味において、近年イラン人研究者によって推進されている発掘調査や研究は、同地域の考古学に新局面をもたらすものと言える。遺跡分布調査としてはスタインの踏査を含めて未調査地域で行われたものが多く、またイラン国内の大学や文化遺産庁に所属する現地研究者による発掘調査も毎年数多く実施されている⁽⁴⁷⁾。また、北西イランに隣接し、古来歴史上深い関係にあったナヒチュヴァンやアルメニア、アゼルバイジャン共和国などの南コーカサス地域やイラク領クルディスタン地域における考古学調査の進展も、同地域を孤立した地域と捉えるのではなくもっと広域の考古学的視座のなかに位置付ける上で極めて重要である⁽⁴⁸⁾。

IV. 結びにかえて

スタインのイラン調査は80年前に行われた考古学踏査にして、20世紀最後の地理学的探検調査の一つでもあった。彼の業績に対しては、「死ぬまで時代遅れで、考古学的な冒険の時代に後戻りしていた」という辛辣な論評もあるが⁽⁴⁹⁾、踏査で得られた所見や事実を漏らさず報告しただけでなく、踏査の道程や当時のイランを生き生きと記録した紀行文としても今なお精彩を失わない。本稿で論じたように、スタインの足跡はいまなお遺跡に残されている上、イラン高原の考古学の先駆的な業績として現代の研究者の出発点であり、かつまた再評価すべき基礎資料として意義をもつと考えられる。

謝辞

本稿の執筆にあたって、2016年11月に下釜はスタインが調査した遺跡のうち数カ所を実見する機会を得た。末筆ながら、現地調査にあたって執筆者らのために格別の便宜を図って下さったジェブライル・ノーキャンデ氏(イラン国立博物館館長)、ホセイン・アージー＝ハラナギ氏(同学芸員)、フェレイドウン・ビグラリ氏(同学芸員)、ラヒーム・ヴェラヤティ(テヘラン大学教授)また北西イランの遺跡踏査に同行してくれたガーデル・エブラヒミ氏(タブリーズ・イスラーム美術大学講師)およびターヘル・ガシミー氏に謝意を表したい。なお、本調査は日本学術振興会科学研究費助成事業「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」(代表: 沼本宏俊、課題番号: 26300027)、及び同「土器生産からみた北メソポタミア青銅器時代過渡期の考古学的研究」(代表: 下釜和也、課題番号: 16K16947)による成果の一部である。

注

1. 「中央アジア踏査記」『西域探検紀行全集』第8巻所収、沢崎順之助訳、白水社、1966年。
原著: *On Ancient Central-Asian Tracks Brief Narrative of Three Expeditions in Innermost Asia and North-Western China*, Macmillan and Co. Ltd, London, 1933.
2. 第1次中央アジア調査: *Ancient Khotan - detailed report of archaeological explorations in Chinese Turkestan*, 2 Vols, Oxford. 1907.

- 第2次中央アジア調査： *Serindia – detailed report of explorations in Central Asia and westernmost China*, 5 Vols, Oxford. 1921.
- 第3次中央アジア調査： *Innermost Asia – detailed report of explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Īrān*, 4 Vols, Oxford. 1928.
3. 金子民雄 1998「考古学的芸術破壊—スタイン第四次中央アジア探検失敗の背景」『學鐙』第95巻第9号 20～25頁 丸善。
 4. 同前註1 沢崎1966年 70～71頁
 5. 当遺跡は、1966年、中央沙漠周辺域に古代の鉱山・製錬跡を探查する米国研究者等により、紀元前5千年紀の銅製錬跡等であることが報告された：Caldwell, Joseph R. ed., 1967, *Investigations at Tal-i-Iblis*, Illinois State Museum Preliminary Reports No.9 Illinois.
 6. Stein, Aurel, 1936, „An Archaeological Tour in the Ancient Persis,” *Iraq* 3, 1936, pp.111 ff.
 7. Stein, Aurel, 1940, *Old Routes of Western Iran. Narrative of an Archaeological Journey Carried Out and Recorded*, Macmillan and Co., Ltd.
 8. Schmidt, Erich Friedrich, 1940, *Flights Over Ancient Cities of Iran*, Chicago, University of Chicago Press.
 9. Stein, 1940, 前掲書, p. 1.
 10. Stein, 1940, 前掲書, pp.vii ff.
 11. 例えば, Stein, 1940, 前掲書, pp. 354ff.
 12. Stein, 1940, 前掲書, 例えば pp. 384-386.
 13. Stein, 1940, 前掲書, p. 351.
 14. こうした城址や古墓群は、遺跡として認知しやすい丘状のテベ型遺跡とは異なり、遠方から視認できないので、現地住民からの情報がなければ遺跡同定は今なお容易ではない。
 15. Mallowan, M. E. L., 1936, “Excavations at Tall Chagar Bazar,” *Iraq* 3: 1-86. および Mallowan, M. E. L., 1946, “Excavation in the Balih Valley,” *Iraq* 8: 111-159. マロワンの踏査はテル・チャガル・バザル遺跡および地域最大級のテル・ブラク遺跡の発掘調査に結実している。
 16. Braidwood, R. J., 1937, *Mounds in the Plain of Antioch: an Archaeological Survey*. Oriental Institute Publications, Vol. XLVIII. Chicago: University of Chicago Press. シカゴ大学のアムク平原調査では前1千年紀の後期ヒッタイト文化の解明を目的として、遺跡踏査のほかにチャタル・ホユック、テル・アル＝ジュダイダ、テル・タイナトなどの主要遺跡を発掘した。
 17. 代表的な研究として以下のものがある。Adams, R. McC., 1965, *Land Behind Baghdad: A History of Settlement on the Diyala Plains*. Chicago: University of Chicago Press.; Adams, R. McC. and H. J. Nissen, 1972, *The Uruk Countryside: The Natural Setting of Urban Societies*. Chicago: University of Chicago Press.; Adams, R. McC., 1981, *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*. Chicago: University of Chicago Press.
 18. 西アジアにおける遺跡分布調査を回顧した論考として、Hole, F., 1980, “Archaeological Survey in Southwest Asia,” *Paléorient* 6: 21-44. がある。
 19. P・S・アレン夫人宛の書簡において「…私の考えは、未調査のルートをできるだけ遠くまでたどった後、カルーン河沿岸のマーラミールに到着したいのです」(J・ミルスキー[杉山二郎・伊吹寛子・瀧梢訳] 1984『考古学探検家スタイン伝(下)』六興出版、216頁)と、スタイン自身が表明している(傍点筆者)。
 20. 以下、パスワ周辺遺跡については、Stein, 1940, 前掲書, pp. 355-361. ここでも遺跡の位置をはじめとする情報は、主にクルド系マーミシュ族古老から得たという。
 21. スタインの踏査旅行には、過去次にも参加したインド測量局の測量士ムハンマド・アイユーブ・ハー

- ンのほか、イラン公共教育局の査察官バフマーン・カリーミーが同行した(Stein, 1940, 前掲書, pp. xiii-xv)。そのほかスタインの調査荷物を運ぶ人足も加わっていただろう。
22. Stein, 1940, 前掲書, p. 329, Plan22.
 23. Stein, 1940, 前掲書, p. 351.
 24. Stein, 1940, 前掲書, p. 366.
 25. Stein, 1940, 前掲書, Plan23.
 26. Stein, 1940, 前掲書, pp. 372-373.
 27. Stein, 1940, 前掲書, pp. 377-381, Plan24. ただし、スタインがこの小規模遺跡の試掘を実施した理由は本文中に明示されていない。
 28. Dyson, R. H. Jr., 1989, "Rediscovering Hasanlu." *Expedition* 31 (2-3): 3-11.; Danti, M., 2004, *The Ilkhanid Heartland: Hasanlu Tepe (Iran) Period I*. Hasanlu Excavation Reports II. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.; Danti, M., 2013, *Hasanlu V: The Late bronze and Iron I Periods*. Hasanlu Excavation Reports III. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
 29. Stein, 1940, 前掲書, pp. 392-393. ここで言及される「層位 (levels)」は層位学的な意味での建築層ではない。
 30. Stein, 1940, 前掲書, pp. 404-405. 失望の原因は、先史時代の彩文土器を発見できなかったためではないか。
 31. McCown, 1942, *The Comparative Stratigraphy of Early Iran*. Studies in Ancient Orient Civilizations No.23. Chicago: Oriental Institute, University of Chicago.; Dyson, R. H., Jr., 1965, "Problems in the Relative Chronology of Iran, 6000-2000 B.C." In R. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, pp. 215-256. Chicago: University of Chicago Press.
 32. Dyson, R. Jr., 1967, "Early Cultures of Solduz, Azerbaijan." In A. U. Pope (ed.), *Survey of Persian Art*, pp.2951-2970. New York: Oxford University Press. や、Danti, M. et al., 2004, "The Search for the Late Chalcolithic/Early Bronze Age Transition in the Ushnu-Solduz Valley, Iran." In A. Sagona (ed.), *A View from the Highlands: Archaeological Studies in Honour of Charles Burney*, pp.583-616. Peeters. のほか、注27に掲げた文献を参照。
 33. Dyson, 1967, 前掲書, p.2957.; Muscarella, O. W., 1968, "Excavations at Dinkha Tepe, 1966." *The Metropolitan Museum of Art Bulletin* XXVII: 187-196.
 34. Hamlin, C., 1974, "The Early Second Millennium Ceramic Assemblage of Dinkha Tepe." *Iran* XII: 125-153.
 35. Stein, 1940, 前掲書, pp. 376-377. スタインはセ・ギルド (Seh-gird) という名称で報告している。
 36. Muscarella, O. W., 1969, "The Tumuli at SéGirdan: aPreliminary Report." *Metropolitan Museum Journal* 2: 5-25.; Muscarella, O. W., 1971, "The Tumuli at SéGirdan: Second Report." *Metropolitan Museum Journal* 4: 5-28.
 37. Deshayes, J., 1973, "La date des tumuli de SéGirdan." *Iran* XI: 176-178.; Muscarella, O. W., 2003, "The Chronology and Culture of SéGirdan: Phase III." *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 9 (1-2): 117-131.
 38. Lyonnet, B. et al., 2009, "Late Chalcolithic Kurgans in Transcaucasia. The cemetery of Soyuq Bulaq (Azerbaijan)." *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 40: 27-44.; Лиюнне, Б. и др., 2011, "Моги́льник эпохи позднего Энеолита Со́юг Була́г в Азербайджа́не." *Российская Археология* 2011-1: 48-61.
 39. Kroll, S., 2004, "Aurel Stein in Hasan Ali: Bemalte Frühbronzezeitliche Keramik im Gebiet des Urmia-Sees: 'Hasan Ali Ware.'" In A. Sagona (ed.), *A View from the Highlands: Archaeological Studies in*

- Honour of Charles Burney*, pp.677-692. Peeters.; Kroll, S, 2005, "Early Bronze Age settlement patterns in the Orumiye Basin." *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 37: 115-121.
40. 註31に掲げた Danti et al. 2004論文などを参照。
 41. ダルマ・テペ (Hamlin, C., 1975, "Dalma Tepe." *Iran* XIII: 111-128.), ハッジ・フィルーズ・テペ (Voigt, M., 1983, *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement*. Hasanlu Excavation Reports I. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.), ピスデリ・テペ (Dyson, R. H., Jr. and T. Cuyler Young, Jr., 1960, "The Solduz Valley, Iran: Pisdeli Tepe." *Antiquity* XXXIV: 19-29.), アグラブ・テペ (Muscarella, O. W., 1973, "Excavations at Agrab Tepe, Iran." *Metropolitan Museum Journal* 8: 47-76.) など調査概報や報告書多数。
 42. Danti, 2013, 前掲書の Appendix I に踏査遺跡の一覧と分布地図が出版されている。
 43. テペ・ミラーバードは Stein, 1940, 前掲書, pp. 384-385.、サクセ・テペは同 pp. 406-407 に記載がある。
 44. Pecorella, P., and M. Salvini, 1984, *Tra lo Zagros e l'Urmia: Ricerche Storiche ed Archeologiche nell'Azerbaigian Iraniano*. Incunabula Graeca 78. Roma: Edizioni dell'Ateneo.
 45. Kleiss, W., and S. Kroll, 1977, "Urartäische Plätze in Iran." *Archäologische Mitteilungen aus Iran* 10: 53-118.; Kleiss, W., and S. Kroll, 1992, "Survey in Ost-Azerbaidjan 1991." *Archäologische Mitteilungen aus Iran* 25: 1-46. ほか。
 46. Swiny, S., 1973, "Survey in North-West Iran, 1971." *East and West* 25: 77-96.
 47. 例えば, Binandeh, A., et al., 2012, "A New Archaeological Research in Northwestern Iran: Prehistoric Settlements fo Little Zab River Basin." *The International Journal of Humanities* 19(2): 27-41.; Kargar, B. and A. Binandeh, 2009, "A Preliminary Report of Excavations at Rabat Tepe, Northwestern Iran." *Iranica Antiqua* 44: 113-129.; Khatib Shahidi, H., 2006, "Recent Investigations at Hasanlu and Reconsideration of its Upper Strata." *The International Journal of Humanities* 13: 17-29. のほか、Kharazi, I., et al., 2016, "Asr-e mefragh-e jadid dar jonüb-e daryäche-ye Orümiyeh, moṭälé'eh-yeh mouredi: Tappeh Qarah-qozlū Miyāndoāb" *Frawashī* 13: 3-15. などペルシア語による報告も数多い。また、Azarnoush, M. (ed.), 2004, *Proceedings of the International Symposium on Iranian Archaeology: Northwestern Region*. Tehran. にも関連文献を収録する。
 48. イラク領クルディスタンについては、大津忠彦・下釜和也2014「イラク・クルディスタンの考古学—課題と可能性—」『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』25号, 1-18頁や、Kopanias, K. and J. MacGinnis (eds.), 2016, *The Archaeology of Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*. Oxford: Archaeopressなどを参照。南コーカサス地域の調査研究は近年多数の論著がある。Rova, E., and M. Tonussi (eds.), 2017, *At the Northern Frontier of Near Eastern Archaeology: Recent Research on Caucasia and Anatolia in the Bronze Age*. Subartu XXXVIII. Turnhout: Brepols. などを参照。
 49. フェイガン, ブライアン・M. (小泉龍人訳) 2010『考古学のあゆみ—古典期から未来に向けて—』朝倉書店、147頁。

(おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授)

(しもがま かずや：古代オリエン特博物館 研究員)